Veritas No.44(2010.7.22)

目次　　（敬称略）

＜神戸女学院の古写真・扁額を読み解く
　　－「真理は爾をして自由を得さしむ」－＞
　　真栄平　房昭（図書館長）

＜特集　夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊＞
　　中村　昌弘　（英文学科）
　　竹中　幸史　（総合文化学科）
　　榎田　雅祥　（音楽学科）
　　森永　康子　（心理・行動科学科）
　　横田　弘文　（環境・バイオサイエンス学科）
　　井出　敦子　（院長室）

＜本の花束　－その４－＞
　　阪上　澄子　（図書館）

＜研究室から＞
　　小林　知博　（心理・行動科学科）

＜史料室から＞

佐伯　裕加恵（史料室）

＜神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談　Ⅵ＞

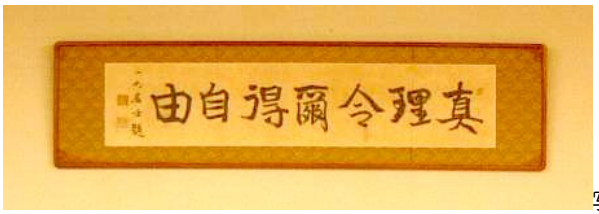
柏木　隆雄　（大阪大学名誉教授・放送大学大阪学習センター所長）

無断転載を禁ず

＜神戸女学院の古写真・扁額を読み解く－ 「真理は爾をして自由を得さしむ」－＞

真栄平　房昭　図書館長　総合文化学科教授

写真①



写真②

写真① 山本通校舎の図書室の風景（左側の扁額に、「真理令爾得自由」
真理は爾をして自由を得さしむ、と書かれている。）

写真①は、神戸女学院のキャンパスが神戸市山本通にあった頃の「図書室」を撮影したもので、往時の読書風景を伝える貴重な資料である。写真左側の「扁額」をよく見ると、「真理は爾（なんじ）をして自由を得さしむ」と書かれている(原漢文「真理令爾得自由」)。新約聖書ヨハネによる福音書 8 章 32 節に由来するこの言葉は、読書を通じて未知の世界と出会い、真理の扉を開く場としての図書館の標語にふさわしい。ちなみに、国立国会図書館の目録ホールにも、「真理がわれらを自由にする」という言葉がギリシア語の原文と一緒に掲げられている。国会図書館の設立は戦後の 1948 年だから、神戸女学院が早くからこの言葉を掲げていたのは「先見の明」というべきか。国会図書館の公式ＨＰを見ると、その設立の根拠となった「国立国会図書館法」の前文に、次のような設立の理念が表明されている。

「国立国会図書館は、真理がわれらを自由にするという確信に立って、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命として、ここに設立される。」（中略）
国立国会図書館の設立理念ともいうべきもので、東京本館の目録ホールに、日本国憲法制定時の憲法担当国務大臣でもあった初代館長金森徳次郎の筆跡で刻まれています。（中略）むろん、民主主義は、ひとり国会議員が情報を持つことにより実現するわけではありません。国民が情報を持つこともまた民主主義の不可欠の要素です。このため、国立国会図書館は、＜真理がわれらを自由にする＞の理念の下、国会に奉仕するとともに、国民の情報ニーズにも応える機関として位置づけられています。

この言葉は、国会図書館の設立に参画した歴史家の羽仁五郎がドイツ留学中に眼にした大学図書館の銘文による。欧米では図書館の入り口などによく見られ、一般にはラテン語で、Veritas liberabit vos［ヴェリタス・リベラービット・ウォース］と記されることが多いという。神戸女学院大学図書館の新館入口の天井にも、この言葉がみられる。さらに興味深いことに、冒頭で紹介した写真の扁額が現存していて、ジュリア・ダッドレー記念館（通称ＪＤ館）の大会議室後方に掲げられている（写真②）。教授会や研修会などの機会に、扁額に見覚えのある方も少なくないだろう。わたくしも眼にする機会があったが、これまで詳しいことは知らなかった。「一六居士題」という文字を手がかりに調べてみると、驚いたことに「明治の三筆」の一人、巌谷一六（いわや　いちろく）の書であることがわかった。当時、関西で最も人気の高かった書家である。そのプロフィールを次に紹介したい。

1834（天保５）年３月 17 日、近江国（滋賀県南部・甲賀郡甲賀町）生まれで、本名は巌谷修、字を誠卿、「一六」と号した。父玄通は水口藩に仕えた医者であったが、一六が６歳の時に亡くなった。母とともに京都に出て、書・漢籍・医術を学び、1868（明治元）年明治政府の役人となり、内閣大書記官・元老院議官・貴族院議員などを歴任した。次に「書風」について述べると、現在の三重県にあった津藤堂藩の書家・中澤雪城に師事したのち、1880（明治 13）年に来日した中国の書家・楊守敬から六朝風の書体を学んで独自の書風を確立した。魏晋唐の法を究め、一派を成し、世に巌谷流、一六流と称された。とくに行草書は瀟洒なスタイルをなす。1905（明治 38）年８月 12 日、72 歳で没した。一六の子息に、有名な童話作家の巌谷小波がいる。

この貴重な扁額が、神戸女学院の歴史と共にいつまでも継承されることを、心から願ってやまない。

＜特集　夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊＞

中村　昌弘　英文学科専任講師

KAHLIL GIBRAN 『THE PROPHET』Alfred A. Knopf Publisher　1973
カリール・ジブラン 著　佐久間彪 訳 『預言者』ポケット版　至光社　2005
カリール・ジブラン 著　船井 幸雄 監訳　『預言者』　成甲書房　2009

ちょっと窮屈そうに並んだ本が壁面を埋める書斎でオススメの１冊を探していた。左から右へ、上段から下段へと視線で Z を幾つも描きながら背文字を目で追っていた。そうしたら懐かしい本が並ぶ一画でちょっと特別な本に手が伸びた。

成りたい自分を探していた僕に先生が贈ってくれたリルケの『若き詩人への手紙』。見返しには先生のサインと傾いた大きなクエスチョンマーク。「他のどんなことよりも好きで好きでたまらないことは？」とあのとき叫んでいた記号は、今では「で、どうよ？」と僕に答えを求める。

卒業目前のある昼下がり、唐突に友達が右手で差し出した『星の王子様』。明らかに読み古されたペーパーバックの表紙をめくり、茶色く変色した扉にしたためられたことばを読んだ。目に見えない左手を授かった意味を模索しながら子どもの頃から何度も読み返してきた本だとわかった。最も辛い時期を一緒に過ごした本を僕に贈ってくれた友達が別れ際にくれたメッセージは ″On ne voit bien qu'avec le cœur.　L'essentiel est invisible pour les yeux.″ だった。

自分で買ったカリール・ジブラン（ハーリル・ジブラーン）の『預言者』。ドレスリハーサルの休憩中に 楽屋で『預言者』を発見した。興味を惹かれてページをめくっている僕の背中越しに「読みたかったら貸してあげるよ」と言ってくれたのは表現者を目指していた１年後輩の友達。お母さんから勝手に拝借した本を又借りするのは少し気おくれしたけれど、結局借りることにした。気に入った。なので自分用に一冊購入した。楽日の翌日、舞台装置の解体が進む Black Box Theater で打ち上げのあと借りていた本を返した。そうしたらそのまま２人だけの詩人の会になった。オルファリーズの街に暮らす様々な職業の人。その人たちからの質問に答えた預言者アルムスターファのことばを触媒にして時間を忘れた。
語り合った。

愛について。
結婚について。
子どもについて。
施しについて。
食べることと飲むことについて。
働くということについて。
喜びと悲しみについて。
家について。
衣服について。
買うことと売ることについて。
罪と罰について。
法律について。
自由について。
理性と情熱について。
心の痛みについて。
自分を知るということについて。
教えるということについて。
友情について。
語るということについて。
時間について。
善と悪について。
祈りについて。
快楽について。
美について。
信仰について。
死について。

大学を卒業し駆け出しの芸術家となって生活費を稼ぐためにはじめようとした画材屋のオープン直前、商品の搬入中に後輩は強盗に撃たれ、そのまま逝ってしまった。〝And when the earth shall claim your limbs, then shall you truly dance.〟という預言者のことば通り、天上で魂を踊らせているだろうか。

改めてページをめくっていると、文言が新たな意味を帯びて今の僕に沁み入ってくる。そして自分という人間の在り方を省みるきっかけを与えてくれる。

教えるということについて語られた〝If he is indeed wise he does not bid you enter the house of his wisdom, but rather leads you to the threshold of your own mind.〟ということばに適う教員になれているだろうか。一人の友として〝when he is silent your heart ceases not to listen to his heart〟という実践ができているだろうか。そして〝yesterday is but today's memory and tomorrow is today's dream〟ということばが示す「今日の連続体としての時間」の中で、自分が思い描く過去と未来を築くために必要な「今日」の過ごし方ができているだろうか、と。

レバノンに生まれアメリカに移住したジブランによって 1923 年に英語で執筆された『預言者』は折に触れて読み返す価値のある書物だと僕は思う。読み返すためには、言うまでもなく最初に一度読んでおかねばならない。その最初の１回がもしまだなら、この夏よい風の吹く日を選んで読んでみてはどうだろうか。心の声がよく聞こえるように人工音は全て消して。英語で通読するのは敷居が高いという向きには「つまみ読み」という手もある。各テーマの分量は３、４ページだから、最も興味を惹かれた部分だけに目を通せばたいした時間はかからない。英語で読んだのではことばを味わう自信がないというなら、和訳も併せて読んでみてはどうだろう。

未来の自分のために今の自分ができること。そんな投資の一環として今のみなさんにお勧めしたい。

竹中　幸史　総合文化学科准教授

教員が学生に薦めたい書籍は、季節を通じてあまり変わらないものだとは思いますが、「夏休みに読む」というのを念頭にいくつか紹介します。

まずは女学院生の夏休みということで思い浮かんだのは、
★太宰治「女生徒」（『走れメロス』新潮文庫所収）
です。太宰の作品は作風の違いによって前期、中期、後期に分けられるのですが、「女生徒」は太宰が明るく伸びやかな小説を多く発表した中期の代表作です。ある女生徒の一日の出来事を通して、若者独特の心理と、刻々とかわるその揺らぎを一人称告白体で見事に表現し、また太宰らしいアフォリズムに満ちています。なお新潮文庫版には、表題作「走れメロス」のほか「富岳百景」「駆込み訴え」「東京八景」など名作、傑作が揃っており、一読して太宰にハマる学生も多いでしょう。

夏休みは長編小説を読むのにいい機会でもあります。そこで
★島崎藤村『夜明け前』（新潮文庫）
は、いかがでしょう。中山道の馬籠宿はちょうど江戸と京の中間にあたり、東西から寄せられた情報が行き交います。その本陣の家に生まれた青山半蔵は、幕末の激動のなか、当主としての勤めを果たしながら新しい時代に希望を託し、誠実に生きてゆくのですが…。この大河小説は、その息もつかせぬ展開もさることながら、自然ならびに人間描写が卓抜です。この小説の舞台となった街道をかつて父と一緒に歩きましたが、「現場に立つ」ことで、小説を読んだ時の感動は何倍にも増幅しました。なお主人公のモデルは、島崎藤村の実父です。

私の専門はフランス近代史ですから、これに関するものも載せておきましょう。
★アラン・コルバン『風景と人間』『空と海』（2002 年および 2007 年、いずれも藤原書店）
夏が好きという方は多いと思いますが、19 世紀にいたるまで、ヨーロッパでは夏は最も嫌われている季節でした。収穫前で食糧が不足するうえ、疫病が発生し、体力のない老人と子どもは生きながらえることができない。それが夏なのです。ところが、19 世紀に海や山といった「美しい自然」が「発見」され、美的価値観を投影された空間＝「風景」が誕生します。さらに同時期、有給休暇制度と鉄道が普及すると、夏は自然を愛でる機会を与えてくれる季節となって、そのイメージを一変させるのです。ここにあげた 2 冊は、私たちの視覚、聴覚、嗅覚、触覚がいかに歴史的に形成され、それらが一体となって私たちの感性を創造してゆくかを明らかにしています。旅先で山や海を眺めながら読むのも良し、お出かけの予定を考えながら、ソファでゆったりと読むのもまた良しです。

榎田　雅祥　音楽学科教授

現代語訳　宇津保物語　浦城二郎訳

数年前、神戸の古本屋で誰も見向きもしない古書の山の中から何気なく手にしたのがこの本との初めての出会いでした。
王朝文学などほとんど興味のなかった私ですが最初の巻「俊蔭」を読み始めてあまりのおもしろさにすっかり虜になってしまい古書店でその巻を読み終えてしまいました。
この日本最古の、そして世界最古の長編小説は源氏物語の母胎となったもので紫式部や

清少納言も愛読していたそうです。 しかし彼女たちの作品と「うつほ物語」が大きく趣を異にする点は全２０巻を通して貫かれた芸術至上主義、とりわけ音楽に対する憧憬です。書かれたのは平安初期とされていますが当時の人々にとっていかに音楽が重要なものであったかがうかがえます。この作品の中で当時の貴族たちは事あるごとに歌を詠み琴や琵琶、笛や鼓などで合奏を始めます。

現在、「うつほ物語」は絵本も含め何冊かの現代語訳が出版されていますが言葉使いの格調の高さ、作品に対する愛着の深さからいっても広島の医学博士である浦城先生が３０年かけて現代語に訳されたこの本をお勧めいたします。

寝苦しい夏の夜、美しくも妖しい平安文学に浸ってみてはいかがでしょうか。

森永　康子　心理・行動科学科教授

I. バーナード・コーエン著　寺嶋英志訳 『数が世界をつくった－数と統計の楽しい教室』青土社　2007 年

「心理学」には「統計」がつきものである。「統計」は数字を使うので、それだけで苦手と思う人も多いようだが、「統計」にはちゃんと存在理由がある。けして心理学専攻の学生を悩ませるためだけのものではない。この本は、数や統計にまつわるエピソードがいろいろと盛り込まれていて、数字が苦手な人も楽しめるはずだ。とは言え、本当に嫌いだったらどうでもよいのかもしれないが。

「読むのはせいぜいひとつの章だけ」という人には、９章の「フローレンス・ナイティンゲール」がおすすめ。「白衣の天使」として、子ども向けの偉人伝に欠かせないナイティンゲールは、意外にも統計学の歴史を語るのに欠かせない人物でもあるのだ。

さらに、キリスト教について考えてみたい人には、28 ページからのエピソードがおもしろいだろう。旧約聖書には、人口調査をしたダビデ王が神の怒りをかい、その罰として、７万人が疫病で死んだと記されている。そのため、イギリスやアメリカでは 18 世紀ころまで人口調査への抵抗があったという。ちなみに、人口調査するようにダビデ王をそそのかしたのは、どうも神様らしい。神の御心は複雑だ。ナイティンゲールは「統計が神のつくった法則を明らかにする」という信念をもっていたというが、統計の発展の背景にはユダヤ・キリスト教の文化が見え隠れしている。なかなか奥が深い。

横田　弘文　環境・バイオサイエンス学科准教授

★『食のリスク学』　中西準子　日本評論社　2010

口蹄疫や狂牛病、毒入り餃子など「食の安全」を脅かす事件が続発し、その度に風評と出荷制限あるいは自主回収が繰り返されている現在、私たちは「食の安全」にどう向き合っていけばよいかを教えてくれる本です。私たちはことさら食品に対してはリスクゼロ（危険性ゼロ）を求めたがる一方で、根拠が曖昧なまま特定の食物や栄養の効果を熱狂的に信じたりもします（フードファディズムといいます）。本書はそんな状況に一石を投じ、上述の事件も含め、昨今の食にまつわるトピックについて、何がリスク（危険性の要因）でそのリスクがどの程度懸念される話なのか、あるいはどこまでが科学的に意味のある話なのかを事例に基づきわかりやすく丁寧に説明しています。

これから様々なライフスタイルを送るみなさんにぜひ読んでもらいたい一冊です。

井出　敦子　院長室職員

Hiroshima mon amour

広島女学院大学が毎夏８月５日から６日にかけて学生を対象に開催している「キリスト教主義大学ジョイント８・６平和学習プログラム」が１０回目を迎えた昨年、２００９年、初めての試みとして設けられた職員のためのプログラムに、幸いにも参加が許され、８月６日の広島に立ちたいという年来の希望が叶うことになりました。

８月５日午前、広島女学院大学ゲーンスチャペルでの開会礼拝をもって始まった二日間のプログラムは、教職員のみなさんのご配慮と、学生スタッフのみなさんの温かくきびきびとしたおもてなしのおかげで、終始とても気持ちのよい充実した時間になりました。

被爆者の方の証言を直接伺う機会を得たことは、あの日から６４年という時間が流れていることを考えると、本当に貴重な体験でした。久しぶりに訪れた平和記念資料館、拡大され、進化した展示に目を見張る一方で、感覚的に遠いことになってしまったように思えた部分もありました。ユネスコの世界遺産（文化遺産）にも登録されている原爆ドームは厳として存在するものの、この復興し発展を遂げた町でこれからもヒロシマを語り継ぐということの難しさを覚えた午後のプログラムでした。

翌６日、午前８時から平和記念公園で開催された「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」に参加しました。８時１５分、平和の鐘が鳴り、平和宣言が行われ、そして、鳩が空へと飛び立っていきました。この日この時この場所に居たことの重さを忘れずにおこう、そう思いました。

「ひろしま平和の歌」の合唱を聞きながら移動を開始、広島女学院中学高等学校東校地にある慰霊碑の前で、午前１０時からまもられた、同学院の平和祈念式に参列いたしました。教職員２０名と生徒３３０名を一瞬にしてなくされ、毎年８月６日に平和を祈る祈念式を重ねてこられたことに思いを致し、中学の生徒さんたちのハンドベルの音色に心を寄せながら献花の列に加えていただきました。

「生ましめんかな」、吉永小百合さんがこの詩を朗読なさるのをお聞きになった方もいらっしゃることでしょう。これは、ご自身も被爆者である広島の詩人、栗原貞子さん（１９１３－２００５）の代表作です。２００８年、この栗原貞子さんが遺された資料約5,０００点が、ご遺族から学校法人広島女学院に寄贈され、２００９年に未発表作品４１編を含む小冊子が刊行されました。（注１）広島へご一緒した学生さんたちにも、これから行かれる学生さんたちにも、みなさまにご一読いただきたい冊子です。

マルグリット・デュラス脚本・アラン・レネ監督のHiroshima mon amour（1959）という、戦争の記憶と傷跡を静かに伝える日仏合作映画があります。(DVD が発売されています。)この映画に主演したのは、エマニュエル・リヴァという舞台出身の女優さんです。彼女は、撮影のために滞在した１９５８年の広島を自らカメラに写しとりました。そのモノクロの画像は、撮影から５０年の時を経て一冊の写真集になって出版されています。（注２）再生を目指してなんとか立ち上がろうとしていた頃の広島の記録として、併せてご覧ください。映画に関する資料やインタビューなども収録されています。

今度は８月９日の長崎行きを計画しています。そして、また、広島を訪ねたいと思うのです。

（１）栗原貞子記念平和文庫運営委員会編『生ましめんかな』学校法人広島女学院、２００９年　928/KU8
（２）『HIROSHIMA　1958』インスクリプト、２００８年　受入中

＜本の花束　ーその４ー＞

阪上　澄子　図書館職員

前号のこのコーナーで図書館本館が紹介されましたので、今回は図書館新館を御紹介したいと思います。

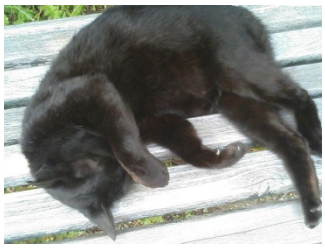
1933（昭和８）年に建てられた本館が増え続ける図書で手狭となったため、1984（昭和 59）年にこの新館が建てられました。ヴォーリズ建築の本館とは趣のまったく異なる建物ですが、ステンドグラスが南と西の窓に入れられ、鮮やかな日差しを取りこんでくれます。また、入口上部のステンドグラスには“Veritas liberabit vos”とありますが、この聖書より取られた文言については館長による巻頭記事で紹介されていますので、そちらをご覧下さい。ちなみに、このニューズレターのタイトル『Veritas』もここからとられました。また、学内初のエレベータや自動ドア、電動式の書架といった新しい機能を備えての登場でした。

決して広いとは言えないこのスペースの中に、今では学習や研究に必要な資料の大部分、また PC など IT 機能が集まり、情報収集の中心となっています。収められた資料約 26 万冊はオンラインで検索することができ、また、各種データベースを使って資料の情報を集めることができます。

しかし、そういった最新機器を使ったピンポイントの検索による情報収集とは別に、一階には「参考図書」という情報を得るための紙ベースのデータも沢山並んでいます。調べものの出発点である「百科事典」、人物を調べる各種「人名事典」、言葉の辞典、いろいろな事象を数値で顕す「統計」、「地図」、「白書」等など。新着図書の中に D.ドーリング他著『世界の中の日本がわかるグローバル統計地図』（東洋書林、2009）がありました。これは、いろいろなトピックのデータを数値やグラフではなく、世界地図の形で表しています。「原油の輸出」の項目では日本の姿はありませんが、「原油の輸入」ではまるまると太った日本が描かれています。書架の間を行き来していると、予期せぬ本との出会いがあります。探しているものにも、探していないものにも出会える新館遊覧をお薦めします。

そして、パソコン画面を見つめたり、参考図書を繰ったりと目や頭が疲れてしまったら、

ペットボトルと帽子を持って、新館の前のシェークスピアガーデンに出て、丹精こめて育てられた樹木や季節ごとに彩る花々を眺め、殆ど住人と化した猫の「クロ」や「ブチ」と遊んで、一息ついて見ませんか。但し、真夏は熱中症にお気を付け下さい。



＜研究室から＞

小林　知博　心理・行動科学科准教授

私は社会心理学を専門としている。「社会心理学」とは、「人間とは一般にどういう行動をとるのか」ということを、「個人(性格)」と「状況（環境)」の中でも、「状況」の力を重視しながら考えていく学問である。例えば目の前で倒れている人がいたら、あなたは助けるだろうか。多くの心理学の研究の結果、人が他者を助けるかどうかは、やさしい人・自分勝手な人という「性格」を超えて、周囲にいる人の数という「状況」が大いに関係することが分かっている。つまり「周囲に人がたくさんいる」と助けないし、「周囲に人がいない」と助ける、という一般的傾向があるのである。もちろん他の要因も影響を及ぼしうる。例えば人は「自分と同じ集団（人種、国籍、仕事、学校、グループなど）に所属する人」にはそうでない人よりも、助けの手を差し伸べる確率が高いことも明らかになっている。

そのほかにも社会心理学では「人はどういう時に他者を（人種や職業や性別などの）ステレオタイプで見るのか」、「自尊心が高い／低い人はどういう人か」、「人はどういう時に社会のルールを守らないのか」、「差別やひいきはなぜ起こるのか」、「人はどういった相手に魅力を感じるのか」など、私たちの日常生活の中の様々な事柄が研究の範疇である。

ところで、社会心理学に限らず心理学を勉強すると、勉強した本人にはどのように役立つのだろうか。心理学者となってから時々人に尋ねられるのは「心理学を勉強すると人の心が読めるようになるんですか」や「心理学者は心の専門家なのだから、さぞかし人間ができていて、家庭も円満で、お子さんは性格の良い人に成長されるのでしょうね」ということである。結論から言うと、人の心がたちどころに読めるようになる「魔法のめがね」のようなものはないし、経済学者が必ずしもお金持ちになれないのと同様、心理学者の人

間性や子育てが素晴らしいということは必ずしもない。

ただ「人を見るものさし」の数は、一般の人よりも多いかも知れない。A 氏は〇〇欲求が高い、B 氏は自尊心の低さを補償（カバー）するためにあのような行動を取っている…等々。また、心理学を勉強すると「人の知覚や思考がいかに自分の都合のよいように解釈され、歪んでいるか」ということが分かるので、自分の思考に対する批判力がつくかもしれない。例えばある人に対し一旦「こういう性格の人だ」という考えを持ってしまうと、その枠組みからでしかその人を評価できなくなってしまいがちだが、その傾向を熟知して自戒するかどうかで他者判断は大きく変化する。

またデータを扱って研究を行うため、ある人の行動を１，２度観察しただけでは結論せず、できるだけ主観を排して何度も観察し、結論するクセがつくかもしれない。この「初見で結論せず別の角度から見てみる」という思考傾向は、対人的な評価のみならず、社会事象全般に対しても用いることができよう。具体的には、「この教材を使えば点数がアップします」「このクリームを使えば肌が綺麗になります」等、巷に溢れる広告を別の角度から見て判断する力である。

もちろんこれらは心理学など学ばなくとも会得される方は大勢おられると思う。だが、より専門的な見地から、人の心理について実際の研究を交えて理解するのは何よりも面白い。心理学を学ぶ学生に、様々な研究への接触を通じてこのような面白さを少しでも伝えられたらと思う。

＜史料室から＞

佐伯　裕加恵　史料室職員

Who’s who in Kobe College
神戸女学院人物伝　その１　ホルブルック先生

今から 116 年前に「神戸女学院 Kobe College」は誕生しました。学校の創立は 1875 年ですが、そのとき、名前はまだありませんでした。その後、女学校を名乗っていましたが、現在の校名になったのが 1894 年のことなのです。

このとき、学校で「誕生」したものは校名だけではありませんでした。学院歌ができました。音楽館、理化学館という新しい２棟の校舎のお披露目もありました。

この２棟の校舎は、当時とても珍しい、音楽と理化学教育のための専用校舎でした。現在、岡田山キャンパスにある音楽館と理学館の先輩というわけです。神戸女学院は専用校

舎を持つことによって、その教育理念がリベラルアーツ　アンド　サイエンス教育であることを見える形で公表したことになります。そして、この校舎を設計したと伝えられているのが、今回ご紹介するホルブルック先生です。

Dr. Mary Anna Holbrook（1854-1910）は、神戸女学院を創立した Miss Eliza Talcott と Miss Julia Elizabeth Dudley を日本に派遣した海外伝道団体アメリカンボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）から派遣された婦人宣教師です。肩書きに Dr.とついているのは、この方がれっきとしたお医者さんだったからです。

先生は、当時アメリカの女子高等教育のモデル校といわれたマウントホリヨークを卒業後、ミシガン大学で医学を学び、医学博士号をとりました。アメリカの婦人として初めて医学博士号をとった人の一人といわれています。その後、先生はアメリカンボードの中国伝道団に加わり、中国で伝道活動を行ないましたが、病気になり、アメリカに帰ってきました。そして病気回復後、母校であるマウントホリヨークで教鞭をとっていたときに日本伝道を志します。このとき先生の頭の中には「日本にマウントホリヨークを」という思いがあったといいます。教え子と 4 人で構想を練り、アメリカンボードにその計画を諮りましたが、時期尚早ということで、この案は入れられませんでした。しかし、先生は日本伝道に加わることになり、来日します。そして 1892 年、女子高等教育機関を目指してカリキュラム改革を行ない、教師を募集していた神戸英和女学校（のちの神戸女学院）に赴任することになりました。（ちなみに先生の 3 人の教え子たちも相次いで神戸女学院で教鞭をとることになります。）自分たちが目指していたものとは少し異なりましたが、日本でリベラルアーツ教育を行なう学校を作ることに参画できたのです。

ホルブルック先生はお医者さんでしたので、生物を始めとする理化学部門の責任者として貢献してくださいました。理化学館では本格的な実験の授業が行なわれました。化学実験、生物学実験、心理学実験など、その時の様子を写した写真も残っています。また授業のほかにも、先生はサイエンス倶楽部を作り、学生たちの勉学のために学外から専門家を

招いて講演会を開いたりして、理化学教育の振興のために尽くしました。お医者さんとしても活躍され、校医としてはもちろん、伝道団の宣教師たちの健康管理にも携わりました。現在の人間科学部の祖ともいえる先生です。

＜神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談　Ⅵ
―ウシオー版『バルザック全集』全２０巻（１８５５年）について―（その３）　＞

柏木 隆雄　元神戸女学院大学総合文化学科助教授、
現在大阪大学名誉教授・放送大学大阪学習センター所長

１．集成への執念

下手の長談義でまことに申し訳ないが、神戸女学院大学図書館架蔵のウシオー版『バルザック全集』全２０巻（１８５５年）Les Oeuvres complètes d'Honoré de Balzac, éd. Houssiaux を取り上げるとしながら、なかなか本題に入れない。ついついウシオー版全集へ至るまでのバルザック周辺の話に紙数を割くことになってしまっている。しかしこの全集のことを語るには、やはり避けては通れない道筋なので、いわば本題取りちがえの非難を覚悟した上で、さて悠々と、厚かましく前回の伝記稿に引き続いて、１８３０年の文壇デビューから没後最初の全集となるウシオー版までの軌跡を追わせてもらうことにしよう。

大学卒業後、親の望む法律家とならず、大衆小説、出版、印刷、活字製造のいずれの事業にも失敗したバルザックが、オノレ・バルザック と本名を署名して『最後のふくろう党』という小説で捲土重来を期し、『結婚の生理学』で当代社会の欲望の構図をカリカチュア風に描いて文壇に「ある一人の独身者」と名乗って登場、１８３０年以降は、折から盛んとなったジャーナリスムに積極的に関わり、幾つもの雑誌に短編小説を寄稿し、これらを私生活情景と総称したことは前回の記事に述べた。

『私生活情景』と総題をつけられた短編集を最初に刊行したのは１８３０年の４月。収められた作品はイタリアからフランスにやってきた仇敵二家の子供が愛し合っての悲劇を描いた『ヴェンデッタ』や後に『ゴプセック』とタイトルが変わって、徹底的に吝嗇な高利貸しと清廉な若手代訴人の交流を描く『不身持ちの危険』などの短編６つを２巻本としてマーム・エ・ドロネ-ヴァレ書店 Mame et Delaunay-Vallée から刊行。翌年さらに『忠告』（後の『ことづて』と『グランド・ブルテーシュ』）、『財布』など２巻が加えられた。

それとほぼ平行して『哲学的ロマンおよびコント集』と題して、『あら皮』、『サラジーヌ』、『知られざる傑作』など、神秘的、幻想的な物語を主体にした長・短編集３巻を上梓、『私生活情景』と同じように、この集も同じ年に第２版を出し（「哲学的ロマン」と題した『あら皮』を集の第１版と数えて、表記の上で第３版となっている）、さらに集のタイトルを「哲学的コント集」と変えて２巻本、「新・哲学的コント集」を１巻加え、１８３３年にはそれらを合わせて再び『哲学的ロマンおよびコント集』をゴスラン書店から４巻本として出版するなど、新聞や雑誌に発表した短編、中編をすぐさま集成、単行本として刊行することを熱心におこなっている。

これは必ずしもバルザックに限らず、ヴィクトル・ユゴーも早くから天才の名を恣（ほしいまま）にして、詩集のみならず、戯曲や小説を間（かん）を措かず発表し続けたが、これもゴスラン書店から『ユゴー著作集』として、作品ができあがるとその著作集の一巻として出版した。したがって著作集の一巻でありながら、初版本ということもあった。こうしたことは雑誌で評判になったものをすぐに単行本として発売し、利益を得ようとする出版社の思惑と、自作の単行本化を願う著者の思惑が一致しての現象であろうが、バルザックの場合、その自己の作品の集成、発刊に他の作家以上に執心するものがあるような気がする。

それが直接現れたのが１８３４年から１８３７年にかけてヴェルデ書店と契約を結んでの『１９世紀風俗研究』１２巻 Etudes de Moeurs au XIXe siècle である。この時に初めて「風俗研究」の総題を示し、それぞれ短・中編をまとめるテーマを、『私生活情景』だけでなく、『地方生活情景』、『パリ生活情景』が新たに加えられ、それぞれ４巻、合計１２巻となった。いわばバルザックの「プレ・全集」とでも言えるもので、第１巻に年下の友人フェリックス・ダヴァンの手になる「序文」が、バルザックの意図する壮大な小説空間の哲学を述べている。後にも説くように、やがて本格的な全集となるフュルヌ版『人間喜劇』の有名な「総序」の文章は、たぶんにこのダヴァンの文章を下敷きにしたところがある。もちろん結局はバルザック自身が細かく自分の意図を説明した上での文章だから、当然ではあるけれど。

２．人物再登場法

しかしそうした著作集を彼の意図のとおりにテーマを追って展開するためには、作品の数はもちろん、登場する人物たちの造形にも意を払う必要がある。そしてそれはなかなか至難の業だ。バルザックはもちろん稀代の想像力の持ち主で、それは作品のさまざまなストーリー展開にも活かされたが、何よりも彼が生み出す小説の世界を前進させるきっかけとなったのは、「人物再登場法」という手法を思いついたことだった。それについて一歳年下の妹ロールは、『わが兄バルザック』に次のように書いている。

兄はトゥルノン通りからカッシニ通りに引っ越そうとしていましたが、私の住んでいたポワソニエ
ール街に駆けつけてきたのです。「敬礼してもらおう！」と彼は嬉しそうに言いました。「僕は掛
け値なしに天才になろうとしてるんだよ！」

天才になる術の発見。それは長編、短編を問わず、彼が小説の中に登場するすべての人物を関係づけ、つなぎあわせて、彼らで構成される一つの「完全な社会」を作るという画期的なアイデアだった。

ロールはこの日を１８３３年頃としているが、研究者によればじっさいはもう少し遅い時期のようだ。しかしロールが描いたバルザックの姿は、どんな実証的な記述よりも「真実」らしさに溢れている。「成功したらどんなにすばらしいだろう！」と叫んで、じっとしていられず、喜色満面、客間を歩きまわる彼。やっと腰かけるや、自分が作った登場人物たちを友人や家族のように論評し、結婚相手まで詮議するのだ。

バルザックは、その「人物再登場法」という魔法の杖を手に入れることによって、以後、自由自在に彼が創り出した人物たちを、さまざまな小説宇宙にはめこんで、有機的に連関させつつ、その各々の小説自体をも結びつかせて、それらの総体が十九世紀フランス社会の雛形を作り上げる夢を実現させることになる。雛形を？いや、雛形というようなこじんまりしたものではない。それは想像力という翼を得れば、幾次元にでも拡大していく壮大な構築物となるのである。

では、「人物再登場法」とはどういう方法なのか。

たとえば１８３１年に発表された『あら皮』において、謹厳な生活を送る貧乏貴族の青年ラファエルに放蕩の哲学を吹き込んだ野心家の青年貴族ラスティニャックは、１８３４年、彼がこの人物再登場法を思いついた記念の作品とされる『ゴリオ爺さん』では、その数年以前の姿で登場する。田舎から出てきたばかりの、野心家ではあるが純情でうぶな青年にすぎない。さらにもっと後の物語となる『ニュシンゲン商会』ではすでに相当の財を築いている。バルザック晩年の作品『知らぬが仏の喜劇役者』では、内務大臣まで立身することになる。彼は『ゴリオ爺さん』の原稿ではもともとマシアックといった名前がつけられていたが、人物再登場法を思いつくに至って、『あら皮』において端役で登場した青年ラスティニャックを再登場させることにしたのだ。

このようにある作品で登場した人物が、また他の作品でアイデンティティーはそのままに、その小説における役割の大小にかかわらず登場する仕組みは、イギリスの歴史小説家ウォルター・スコットやそれに影響を受けたアメリカの小説家、例の『モヒカン族の最後』で有名なフェニモア・クーパーに先例はある。しかしバルザックはそれをさらに組織的に、且つ意図的におこなった。

バルザックが「戸籍簿と競争する」と言い、また愛人ハンスカ夫人に宛てて「この私は、

自分の頭に社会をそっくり持つことになるのです」と豪語したように、このシステムがあってはじめて『人間喜劇』の長編、短編あわせて百編にも達する小説群が有機的なつながりを持って生まれることになった。

たとえば、ある作品で純情可憐な少女が登場する。彼女はその姓から別の作品で恐ろしい殺人者として登場していた男の娘であることが明らかにされて、読者は彼女のドラマに父親のそれを重ねることになる。その時作者は父親についてながながと説明する必要はない。またある作品で愛人に裏切られて社交界から姿を隠した女性のことが挿話的に語られている。彼女はその後どうなったか。別の作品で、その女性が隠遁した土地で再び恋に落ち、また捨てられる物語が織られるといった具合である。

この手法を使えば、無限に物語の世界が増幅していき、それにともなって人間関係の心理のひだや駆け引きが、さらに複雑かつ繊細に追求されることになる。そしてそうした人物たちを支配している運命の大きな構図さえ見えてくることになるのである。登場人物の名前が既出の小説に登場した人物の名におきかえられている例は、先にも言うようにスコット、クーパーなどバルザック以前にもあるが、『ゴリオ爺さん』において、主人公にその方法を適用したことの意味はじつに大きい。以後バルザックは自作の再版のたびに、それぞれの小説のいろいろな場面、たとえば青年貴族の集まりにラスティニャックの名を新しく加えたり、他の名前で登場していた青年を、ある小説では彼の名前に置き換えたりして、ラスティニャックの人物像を増幅していった。このシステムは彼以外の登場人物についても適用され、名前が入れ換えられて人間関係、縁戚関係が次第に緊密に整理されていくことになる。こうしてできあがった登場人物の総計は、およそ２０００名。もちろん１回きりしか出てこない場合もあるし、たんに会話の話題にされたり、舞踏会の出席者の名前に列挙されるだけで、じっさいの物語には登場しないものもある。

『人間喜劇』に登場するすべての人物について紳士録なみの伝記事典を編集したフェルナン・ロットによれば、最も登場回数の多いのは例のラスティニャックの愛人の夫ニュシンゲン男爵で 31 回、ラスティニャックと同じ下宿にいた医学生のちの名医ビアンションが 29 回、ラスティニャックは 29 回という。

これを見てもわかるように、登場回数の多いのは必ずしも一作品においてのヒーロー、ヒロインというわけではない。むしろ脇役や狂言回しとして既出の人物の再登場の意味があるというべきだろう。ある作品で名前だけ登場するにしても既にその人物の来歴や物語を知っている読者にとっては、親しい友人があらわれた気分になることもあるし、現在読んでいる小説の主人公の背後から、既知の人物の隠されたドラマが映し出されて、主人公自身のドラマが暗示されることにもなる。

したがってバルザックの作品を数多く読めば読むほど、その人物たちと親しくなって、ますますその世界が「実在化」し、さらに次に読む世界が広がっていくことになる。バルザックならずとも、日常の会話にうんざりして「そんなどうでもいい話はさておいて、現実に戻ろうじゃないか。かわいそうなウジェニー・グランデの話に戻ろう！」と言いたく

なるのである。

３．『哲学的研究』の発刊とシャルパンティエ文庫、フュルヌ版『人間喜劇』の刊行

１８３４年から始まった『１９世紀風俗研究』１２巻の刊行とは別に、やはりヴェルデ書店から１８３５年から１８４０年にかけて『哲学的研究』全１０巻が計画された。これは先の『哲学的ロマン及びコント集』をほぼ踏襲した作品のラインナップとなっているが、１０巻を予定していながら、どんどん巻数が増え、１８３６年に１０巻を出した後、さらにデロワ・エ・ルクー書店 Delloye et Lecou に変わって、１８３６年から１８３７年にかけて５巻（その中には初刊となる『ファチーノ・カーネ』や、大幅な改稿、増補を経た『知られざる傑作』も含まれる）、さらに版元をスヴラン書店 Souverain に変えて、５巻刊行されることになったが、１巻から３０巻が予告されていたが、実際には６巻から１０巻までと、１８巻、２６巻、２７巻と３０巻は刊行されなかったようだ。

これらはいずれも１２折本で、１８３９年に新興のシャルパンティエ社 Charpentier が企画した『名作コレクション』に『私生活情景』、『地方生活情景』、『パリ生活情景』に加えて、『ゴリオ爺さん』や『谷間の百合』など、その時点で評判になった小説１０作品をそのコレクションで出したことにも関係するかも知れない。当時の人気作家や１８世紀の名作などを収めたコレクションはいずれも同じ版形の１２折本で、しかも一冊３．５フランと定価が付けられていて、あたかも今日の文庫本を思わせる出版形式で、多くの購買層を獲得したものだった。したがってもしバルザックの愛好家がヴェルデ版 Werdet の８折本『１９世紀風俗研究』１２巻の代わりに、その後に出た『哲学的研究』２０数巻とシャルパンティエのコレクションでバルザック作品を購入していたとしたら、ほぼ同じ版形でのバルザック「全集」を構成することになるわけだ。

１８３４年から１８３９年、すなわち『１９世紀風俗研究』１２巻の刊行から『哲学研究』全２０数巻およびシャルパンティエ・コレクションの１６冊に集められた作品は、バルザックのもっとも旺盛な著作活動の報告でもあるが、彼はその『哲学研究』叢書を刊行する過程でさらに壮大なプランを練り、１８４１年、バルザックはフュルヌ Furne, デュボシェ Dubochet, エッツェル Hetzel およびポーラン Paulin の各書店と『人間喜劇』全１７巻の出版契約を交わし、翌１８４２年から刊行を開始する。一般にこの全集は「フュルヌ」版『人間喜劇』と称されるが、実際にこの全集の計画を主導したのは、ポーラン書店の雇い人から出発して、画家グランヴィルとバルザック、ミュッセその他当時の作家たちを動員して、また自らも健筆を奮って画文一致の風刺作品『動物たちの私生活情景』を発刊、大成功を収めたエッツェルであった。

このいわゆるフュルヌ版『人間喜劇』は、バルザックの従来の作品を集大成して、大きく『風俗研究』、『哲学的研究』、『分析的研究』に分け、『風俗研究』は「私生活情景」、「地方生活情景」、「パリ生活情景」、「政治生活情景」、「軍隊生活情景」、「田園生活情景」の６

つの情景からなり、それぞれの情景が３０前後の短編、中編、長編をもって構成されるという、膨大な作品だった。そしておそらくはエッツェルのアイデアで、ドーミエやグランヴィル、ガヴァルニ、ベルタルといった当代の優れた挿絵画家を動員して新しく木口版画印刷の粋を極めた挿画を各編数枚添えるといった豪華なものだった。

この『人間喜劇』は１８４２年に第１巻が刊行され、以後続刊されるが、その間にもバルザックは新しい長編小説をさまざまな雑誌、新聞に連載することを怠らなかった。いやむしろこの頃から本当に脂がのりだして、彼自身の世界観や小説観がいよいよ熟成してきたと言えるだろう。１８４２年から１８４８年にかけての著作はことごとく傑作と言っていい。そしてフュルヌ版『人間喜劇』を刊行して３年、１８４５年にバルザックは再版に向けて『人間喜劇』の総カタログなるものを印刷、全集予約の広告としようとしたが、それが人の眼に触れたのは１８６０年雑誌『アンバサダー』誌においてだった。これは執筆計画表とでも称して良いようなもので、各『情景』や『研究』に収められる作品に番号が付けられ、すでに何度も刊行されているものから、現在執筆中のもの、まだ書いてないがこれから完成する予定のものまで、合わせて１００数十遍に及ぶカタログで、以後このカタログの順番通りに『人間喜劇』の配列は従うことになる。

たとえばフュルヌ版『人間喜劇』を刊行している時には完成していなかった傑作「貧しき縁者たち」二部作である『いとこベット』、『いとこポンス』の完成は、１８４６年から１８４８年となる。ハンスカ夫人との結婚問題で疲労困憊しながらも、バルザックは体力の続く限り創作活動に邁進した。そればかりではない。続々と印刷発刊されるフュルヌ版の自分用の本に、どんどん加筆訂正を施して、『人間喜劇』初版完成後の再版を目指して、準備も怠りなかった。そして『人間喜劇』そのものの構成も、始め考えていたのとは異なる新たな作品の順番に思いを巡らせて、自分用の本にこの作品は「私生活情景」から「田園生活情景」へ移すこと、といった覚書を付けたり、加筆が長すぎると新たに紙をページに貼り付けて、改稿の文章を長々と書きこんだりした。バルザックの膨大に書きこんだ後のあるその１７巻本『人間喜劇』は、バルザックの死後、ハンスカ夫人の手から、ベルギーの愛書家でバルザック研究の礎を開いたロヴァンジュール子爵の買収するところとなり、１９６５年バルザックの優れた研究者であるJ.-A.デュクルノーが自ら「ビブリオフィル・ド・ロリジナル」なる刊行会を設立、完全な復刻本全集を企図した際に、その底本となった。その復刻版全集ついては、また次の機会に述べるとして、この１７巻版『人間喜劇』はバルザック生前の最後の集大成となった画期的なものである。

バルザックが１８３０年の創作開始以来、雑誌連載から版が改まる度に、加筆修正をおこなったことはすでに書いたが、フュルヌ版『人間喜劇』を刊行するにあたって、出来るだけ巻数を抑えるために、初版では読みやすさを考慮して、改行がしばしばおこなわれていたものが、頁数を少なくするために、改行を出来る限り少なくし、活字も小さいものを使用、いささか通読するには読みにくい感じもするが、以後、すべてのバルザック死後のテクストは、この読みにくい形式のままに続くことになる。

４．ウシオー版『バルザック全集』

バルザックが本来予定していた彼の作品の巻数は１６巻だったが、上にも言うように『人間喜劇』刊行と同時に、雑誌への連載もしていたから、新たに作品が出来上がって、それを組み入れることになる。生前のフュルヌ版の１７巻目は、１６巻の『哲学的研究』と『分析的研究』の巻だが、そのあとに『パリ生活情景』の「貧しき縁者たち」二部作、『いとこベット』、『いとこポンス』が加わった。

この書が刊行された１８４８年以降、バルザックの執筆活動は、体力の衰えと、長年望んできたハンスカ夫人との結婚騒動とによって大きく阻害され、ウクライナの土地に住むハンスカ夫人に会うために長旅をし、ウクライナ逗留したりして、やっとキエフで結婚式を挙げてパリに帰ってきたときには、気息奄々、パリの自宅に帰ってきてたちまち病の床に伏すありさまだった。そして１８５０年8月１８日、ヴィクトル・ユゴーが友人バルザックを見舞った夜に息を引き取った。夫の遺産を相続したハンスカ夫人は、フュルヌ版『人間喜劇』の続編の刊行をウシオー書店に託し、新バルザック全集として、既刊１７巻をそのまま印刷して、１８巻に遺稿となった『パリ生活情景』、『政治生活情景』、『田園生活情景』、『分析的研究』として、『高級娼婦の栄光と悲惨』の結末部分、『現代史の裏面』、『農民』などを収め、１９巻にバルザックが晩年に力を注いだ演劇、『ヴォートラン』、『キノラの悪だくみ』、『パメラ・ジロー』を初めて収録、２０巻にはバルザックが故郷の偉人フランソワ・ラブレーの『ガルガンチュア物語』に範を取った『風流滑稽譚』を収めて、文字通りの全集として、第１巻の巻頭にベランジェ描くバルザック像を口絵として添えてある。１９６０年代後半にデュクルノーが中心となって復刻したフュルヌ版『人間喜劇』の第１巻には、このバルザックの肖像が同じく口絵としてあるが、本来のフュルヌ版の初版にはこの口絵はついていない。（このフュルヌ版初版１７冊をパリの古書店―古本屋というには、あまりに高雅な本が連ねてあった―で見つけて、思案投げ首の末購入した顛末は、また話す機会もあるかもしれない。）

ながなが述べてきたが、ようやく本来の雑談の主題、神戸女学院大学図書館架蔵のウシオー版『バルザック全集』全２０巻へと辿り着いた。この本は装丁は疑似粒状突起革装８折判で保存度は良好である。これは連載の第２回（通算では５回目）に書いたとおり、私が１９８１年にパリに神戸女学院から留学させていただいていた折に、古書はほとんどすべてそこで買っていたラスパイユ通りとレンヌ通りが交差するあたりにあったガストン・コラス書店で見つけたもので、これも図書館の人に当時の購入価格を尋ねたら、私が予想していた価格よりも高く（もちろん当時の日本の外国図書を扱う書店のものよりは遙かに安かったが）、やはり高価だったのだな、と妙に感心したことだった。

それはともかく、このウシオー版バルザック全集は、膨大なバルザックの著作の真の意味の集大成であり、かつきわめて貴重なフュルヌ版『人間喜劇』の忠実な再版でもあるの

で、バルザックと同時代の読者や作家たちが目にしたテクストと同じものを見、読むことができる重要なツールでもある。文学の研究は、現在プルーストを始め、バルザック、フロベールもまた彼らが残した手稿を綿密に読み解いて、その原風景を探るのが主流、とまではいかないまでも、大きな成果をあげ、日本人研究者で世界的な業績を上げているのもこの分野でのことが多い。しかし、手書き原稿（プルーストの場合はタイプ原稿も含まれる）は、その時の読者の目に触れるものでもなく、また作者が目に触れてほしいと思ったかどうかわからないものだ。研究者には便利なものだろうけれど、同時代の作家、読者にとって、影響を受けたのは刊行された、市場に流布した刊本である。本来文学の研究は、なによりもそうした誰でも手に入れることができ、誰でもが読めた、また現在でも読めるテクストを基本として、勝負するものではなかろうか。

ウシオー版『バルザック全集』は、バルザック死後、その彼の意をもっとも備えた最初の全集として、彼が成功を期していた戯曲作品、郷土の偉人ラブレーに対抗すると渾身の力を振るった『風流滑稽譚』を『人間喜劇』の諸作品に加えたものとして、当時の読書人にもっとも好意的に迎え入れられるべきテキストであり、その価値が揺らぐことはない。

私がこうした古本に限りなく愛情を感じるのも、それらがそうした同時代性の証言者であることにもよる。図書館に眠るウシオー版バルザック全集もそのまま書庫に静かに眠らせておくのはまことにもったいない。それがバルザックの苦闘の５０年の紛れもない軌跡として、眼前に１９世紀の香りとともに、よみがえってくるものだからだ。古書店の価格の高騰をここで言わなくても、バルザック夫人が故人の遺志を少なくとも継ぐ意志で編んだウシオー版全集が、１５０年を経て、遙か東方の瀬戸内の潮風を運ぶ風の中で呼吸していることを思うのは、それほど安手の感傷ではなかろう。

ではバルザック死後の全集はこれで尽きるか、というともちろんそうではない。以後さらに工夫を凝らした全集が出現する。その画期的なものが、図書館に別に蔵するオネットンム版バルザック全集全２８巻である。次回はウシオー版全集に続くその他のエディションにも触れながら、語り継ぐことにしよう。